

ルーデンについて

清水邦生

I

ロシア文学におけるいわゆる余計者の群像は、それぞれに独自の強烈な個性をもつ。ツルゲーネフの小説『ルーデン』の主人公ルーデンは、そのなかにあって、19世紀30年代に精神的成長をとげた進歩的貴族インテリゲンツィヤの典型として理解される。

文学に現われた余計者たちは、それぞれの時代の、一定の社会的現象の芸術的反映である。それぞれの時代の子、「現代の英雄」であり、時代の先進の人間の積極面あるいは消極面を体現した。農奴制ロシアの体制にとって不必要な者たちは、多少とも先進的な貴族インテリゲンツィヤの典型としての普遍性をもっていた。

「これは（オネーギン）はロシアにおいてのみ可能である。ロシアにおいてオネーギンは必然的な存在であり、至る所に見うけられる。それは何事にもたずさわったことがないゆえに怠け者であり、自分の生活する環境のなかで余計な人間であり、しかも、そこから抜け出るための十分な性格の強さをもっていない……彼はあらゆることを始めるが、何事も最後までやり通さなかった。彼は行動することが少なかつただけに、それだけより多く思索した。

……チャーツキー^①は議論家型のオネーギンであり、オネーギンの兄である。レールモントフの「現代の英雄」はオネーギンの弟である……われわ

① 19世紀初期の詩人、外交官であったグリボエドフの戯曲『知恵の悲しみ』の主人公。

れが官吏または地主たることを望まないかぎり、われわれは多少の程度においてオネーギンであることは事実である」^①

ロシア文学に現われた余計者についての、ゲルツェンのこの古典的な定義は、今日でも生きており、その大部分はまたルーゼンにも適用される。

1812年の祖国戦争（ナポレオン戦争）は、ロシア国内に、かつてない民族的意識の高揚を呼起した。敗走するフランス軍を追って、西欧に進撃した将校たち——貴族インテリゲンツィヤは、西欧の進んだ文明を、目の当り見て、大きな刺戟をうける。祖国の後進性や国民の貧困状態を顧みるとき、現状への不満と抗議が生れ、それはやがて、専制からの解放をめざすデカブリストの運動となって現われる。しかし、1825年の彼らの叛乱は失敗した。ニコライ1世の30年に及ぶ長い反動政治が続く。この暗い時代にあっても、先進的な貴族インテリゲンツィヤは、新しい生活の理想を求めて、活動を続けるが、彼らもやはり、デカブリストと同様に、人民大衆から離れた存在であったので、彼らの実践的活動の基盤はなかった。彼らは環境と対立し、自分のなかに多くの矛盾を生み、こうして余計者のタイプが形成されていった。

余計者はさまざまな形象としてロシア文学に登場し、複雑な進化をとげていく。彼らの社会的および心理的特徴として多かれ少なかれ共通しているのは、環境からの背離、生活に対する失望、倦怠、孤独、心理の分裂、内省癖などである。むろん、作家の資質や時代的特質などの違いによって、余計者的主人公もそれぞれに異なり、固有の特性をもっている。彼らが社会的に余計であることの程度もまた同じではない。文学は多面的に彼らを写し、肯定面をも否定面をも併せ示した。ある者は明確な目標もなく、ある者は理想はもったが、それを実現する力をもたなかった。しかし、現実への不満や抗議、あるいは現実との対立や失敗は、農奴制秩序を否定する

① ゲルツェン：ロシアにおける革命思想の発達。ゲルツェン全集（全30巻）、第7巻、1959年、204ページ。

意味をもっていた。それゆえ、彼らは、旧体制の改革ないしは打倒のためには必要な者であった。

彼らは、時代の先進的人間であるがゆえに、余計者たらざるをえないという悲劇が生れる。ルーゼンのタイプの余計者は、現存する秩序に不満を抱き、個性に対する圧迫に抗議し、自由思想を宣伝し、祖国と国民のために新しい生活の理想を求め献身的な活動を望みつつも、現実のなかに、そのための舞台はえられない。そのため空想家にとどまらざるをえず、現実の社会的活動を行う可能性をもたなかった。

彼らは現実の充分の知識と理解を持合せず、社会改革の真の途を探し当てえられなかった。そして彼らの生活条件は彼らの性格を鍛えるものではなかった。現実の困難や障碍にぶつかって屈服し、実践活動を避けるようになる。しかしまた、彼らは上流社会に背を向け、そこでの出世を求めないが、環境のなかで、何かを変革するには無力であった。

II

『ルーゼン』は1855年に書かれた。クリミア戦役たけなわの時である。この年の2月にニコライ1世が死んだが、それは、国内に明るい期待をなげかけるものであった。ロシアにおいて悪名高い検閲の圧力も、いくらか弱まり、現実の写実主義的な描出の範囲と内容を拡大し、深めうる明るい見透しも生れた。8月にはセヴァストーポリが陥落し、クリミア戦役におけるロシアの敗北は決定的となる。

1850年代は、ロシア史において大きな転換期をなしている。前述の事情に加えて、農民の不満の増大、農奴制廃止を要求する声の強化などが見られ、社会の動きは大きく変わろうとしており、農奴解放（1861年）の前夜であった。

文学について言えば、50年代に先行する40年代は空白であった。40年代を扱った作品には見るべきものが、まだなかったのである。それは、複雑

な歴史的条件によるものであるが、反動的な力の圧迫は、その最大のものであり、ことに1848年以降は、甚だしいものがあった。しかし、それは今や、徐々にではあるが、変りつつあった。

こうした状態のなかで、とくに社会の息吹き、時代の要求を敏感に感得し推察する直感的能力を強くもっていたツルゲーネフは、50年代の精神的知的活動にまだ生々しい強い痕跡を残している30—40年代の、精神的知的活動を芸術化すべき時が、来たことを自覚したであろう。

それは、ツルゲーネフ自身をも、ある意味では含むところの、30—40年代の貴族インテリゲンツィヤの特質を明らかにし、彼らの演じた歴史的役割を規定しようとする文学的欲求であった。彼らを余計者たらしめた諸々の要因を探り、すでに社会の舞台に登場しはじめた新しい世代との、つながりを見究め、差迫った歴史的社会的な課題の見地から、彼らに判決を加えなければならなかった。換言すれば、30—40年代の主人公ルーゼンが、50年代に入っても、「現代の英雄」たりうるか、ロシアの解放運動の先頭に立ち、諸々の障害を克服し、人々を啓蒙するのみでなく、人々を自分の後に従わせて導いていくことができるかどうか、という問題に答えることであった。もし、それが不可能ならば、彼らは、すでに登場しつつあった雑階級—平民出のインテリゲンツィヤに取って代られるであろう。また、後者の側からすれば、前者のなかの、どのようなものが克服され、捨去られなければならないかが、明らかにされる必要もあった。

ましてツルゲーネフは、この『ルーゼン』に至るまでの多くの作品において、余計者のタイプに強い関心を寄せていた。『ある余計者の日記』(1849)、『ンチグロフスキー郡のハムレット』(1849)、『往復書簡』(1854)、『ヤーコフ・パーシニコフ』(1855)などの作品において、30—40年代の貴族インテリゲンツィヤの運命というテーマを扱っている。そこでは、彼らの心理、内面世界、また民族的性格が追求される。たえまない内省と自嘲に悩む思索の緊張した世界が写しだされ、彼らの精神的生活的ドラマが、

その思想的内容となっている。それは、また、レールモントフ的なテーマ、「自己の世代への批判」でもある。デカブリスト運動挫折後の、暗黒の時代に形成されたロマンチスト＝観念論者、そして、「自分の環境のなかで他人であり、悪をなすことを欲せず、善をなすことにおいて無力な人間^①」の苦悩は、ここではまだ、歴史的には解明されない。これらの物語の主人公は、ツルゲーネフによって、その否定面が強く意識されたハムレット型の人間として、とらえられている。

いわば、この一連の作品は『ルーヂン』へのエチュード的なものでもあった。ツルゲーネフは、農奴制の下での余計者という存在の、哀れな面、あるいは悲劇的な面に目を向け、余計者の形象の進化をとらえようとしたのである。そして、ルーヂンは、これらの余計者の最高の完成した典型的形象として、その本性の肯定面をも否定面をも同時にもって、現われるべきであった。

ツルゲーネフは、この課題を果すのに、もっとも適任であると言える。スタンケーヴィチ、バクーニン、グラノフスキーなどの、輝かしい知性が指導した、30年代の思想的運動を身近に見つめていたばかりでなく、彼自身、ある程度またその一員であったからである。そして、ルーヂンは、この運動のなかで育かれた貴族インテリゲンツィヤとして登場するのである。

III

ルーヂンは小説のなかで、30年代のモスクワ大学の学生グループの一つ、ポコールスキーのグループで、精神的成長をとげた者として、またそのなかで、重要な役割を果たした者として描かれている。最初ツルゲーネフは、バクーニンをモデルとして、ルーヂンを描こうとしたが、最初の原稿に、幾度か筆を加え、改めていて、描出された主人公の姿には、性格、外貌、仕草、

① ゲルツェン：ロシア文学の新たな段階。ゲルツェン全集（全30巻）、第18巻、1959年、183ページ。

習慣といったものに、部分的にバクーニンとの相似が残ったにすぎない。

ゴーリキーは『ロシア文学史』のなかで、「ルーヂンは、バクーニンでもあり、ゲルツェンでもあり、また部分的にはツルゲーネフ自身でもある^①」と言っている。ツルゲーネフは、決して、特定の一個人を描こうとしたのではなく、ルーヂンについての、ゴーリキーのこの高い評価の言葉の意味は、ルーヂンにおいて、30—40年代の進歩的なインテリゲンツィヤの一つの典型が作られたということであろう。典型的な形象は、現実のなかから偶然的なものを切捨て、本質的なものをつかみ、強調し、普遍性を与えることによって完成される。

ルーヂンがポコールスキーの学生グループに加わっていたことは、彼の特質を考える上での重要な要素の一つである。

ポコールスキーが、スタンケーヴィチをモデルとしたものであることは、ツルゲーネフが次のように言っていることから、明らかである。

「ポコールスキーを描いていたとき、スタンケーヴィチの姿が、私のま^②えにあった」

スタンケーヴィチは、30年代のインテリゲンツィヤの精神的発達に著しい役割を果たした人物である。詩人でもあった彼は、ドイツ観念論哲学、とくにヘーゲルの影響を強く受け、啓蒙主義の立場にあった。彼のグループは1831年頃に形成され、ベリンスキーやバクーニンもその一員であった。これはまだ、デカブリストの悲劇の傷跡が、生々しく感じられた時期である。

スタンケーヴィチのグループは、ゲルツェンのグループとともに、当時の先進的思想活動を代表するものである。それらは、デカブリスト運動の残した教訓を汲取ろうと努め、先駆者たちの思想と行動を考察し、祖国の進路、ひいては自分たちの進むべき路を打立てようとした。

① ゴーリキー：『ロシア文学史』邦訳、五月書房、1952年、下巻、474ページ。

② ツルゲーネフ：エヌ・ヴェ・スタンケーヴィチについての覚え書。ツルゲーネフ選集（全12巻）、第11巻、1956年、235ページ。

ただ、目標は同じにせよ、彼らの行き方には大きな相違が見られる。ゲルツェンらのグループは、より具体的、実践的な方途を探ろうとし、フランス革命の思想を学び、憲法と共和国の思想を宣伝した。これに対して、スタンケーヴィチらのグループは、ドイツの哲学的観念論とロマン主義文学の強い影響の下に、もっぱら、哲学、歴史、芸術などの一般的問題に取り組み、世界観、民族の原理、人間の道徳的原理、自己完成の道等についての、抽象的思索と討論にふけり、社会および人間生活の客観的法則の認識を志した。

従って、ここに彼らの認識の帕特ス、分析の精神または内省が生れ、思考の観念性、抽象性もまたここに根ざすものであり、これらは、30年代のインテリゲンツィヤに特有のものであった。

この両者は、デカブリストの敗北から40年代に入るまでの時期において、ロシアの知的活動を代表した。この知的活動について、ゲルツェンは次のように指摘している。

「国の知的活動は、国の上層部や基底においてではなく、その中間において、すなわち、主に下位および中位の貴族階級のなかで行われた^①」

そして、この知的活動に従事した人々の意識された熱中性は、「われわれの道徳的発達における強力な活動家であった^②」と、チュルヌイシェフスキーは、彼らのロマン主義と帕特スについて、評価を下している。

ルーデンはこの「下位の貴族」に相当し、また、ロマン主義と、認識の強烈な帕特スとをもった熱中家である。

上述のゲルツェンの言葉は、また、社会の先進的運動のヘゲモニーが、以前の上流貴族からその下位の層に移ったことを意味する。ツルゲーネフ

① ゲルツェン：ロシアにおける革命思想の発達。ゲルツェン全集（全30巻）、第7巻、1959年、212ページ。

② チュルヌイシェフスキー：エヌ・オガリョフの詩。チュルヌイシェフスキー選集（1巻）、1951年、407ページ。

は、この小説において、ラスンスカヤ家のサロンで、その登場が待ちうけられていたところの、経済学の論文を執筆したというデレットアント、侍従補で男爵のムッフエリを出現させず、その代りにルーゼンを来訪させたことによって、この交替を表現している。

また、ツルゲーネフが、この男爵を、「やたらにヘーゲルをふりまわす」者として紹介しているのに対し、ルーゼンを特定の哲学体系の学徒として描いていないことは、ルーゼンたちが、ドイツ古典哲学のイデーを盲目的に信奉したのではなく、ロシア的土壌の上で解釈し直し、あるいは克服したことを意味する。

ツルゲーネフはこの小説のなかで、ルーゼンの学生時代の友人で、やはりポコールスキーのグループに属していたことのあるレジネフに、彼らが、祖国と国民の前途を憂う誇高い自負と希望を抱いて、学問と真理の探求に真摯な熱情をもやした、夢と詩情にみちた青春時代を、生き生きと語らせている。また『ルーゼン』とほぼ時を同じくして発表された、チュルヌイェフスキーの『ロシア文学のゴゴリ時代概観』の一節は、スタンケーヴィチのグループを次のように特徴づけている。

「彼らの心は詩に陶醉していた。彼らが人々に向って高唱する善き知らせをめめて、光栄は彼らに冠を用意していた。そして意識的熱中性の力に惹かれる彼らは、前方を志向した……数分の間、彼らの高尚な社会のなかに、身を移したいと思う者は、『ルーゼン』のなかの、レジネフの青春時代についての話と、ツルゲーネフ氏の物語の驚歎すべきエピローグを読み返すがよいであろう^①」

ルーゼンは、ポコールスキーやレジネフよりもはるかに多くの書を読み、「系統だった知力とずばぬけた記憶力」をもっている。彼の知的な力は、「読んだものから、すぐに普遍的なことをひきだし、問題の本質をつかみ、

① チュルヌイェフスキー：ロシア文学のゴゴリ時代概観。チュルヌイェフスキー選集（1巻）、1951年、280ページ。

そこから今度は、見事な正しい思想の糸を、四方八方へと伸ばして、精神的展望を開いて見せる」(第6章) ことにある。

ルーゼンもポコールスキーもロマン主義者である。彼らのロマン主義は、人間、美、愛、生活の理想などについての、高い理解のなかに現われる。ルーゼンは言う。「個々の現象のなかに、共通の原理を発見したいという意欲は、人間の知力の根本的特質の一つであり、人間は、知識や科学や、その力を信頼しなければならない」(第3章)それがなかったならば、「国民の欲求や意義や将来を理解すること」ができない。

暗い反動時代における知性の自由と発達への圧迫に抗議するこの言葉には、人間とその知的な力への讃歌と同時に祖国と国民の運命に積極的に関与しようとする熱情が見られる。ルーゼンの考えはすべて未来に向けられる。「人間の生命は、束の間の、はかないものであるが、偉大なことはすべて人間を通じて完成される。そのような最高の力の道具であるという意識は、人間にとって他のあらゆる喜びにまさるものである」

高い理想に燃えるこれらの言葉は、たとえ抽象的であるにせよ、若い魂にエゴイズムを呼び起すものではなく、それを克服することによって、全体の幸福のために自分を犠牲にすることを呼掛ける。ルーゼンは、理性と啓蒙の勝利、先進的な思想の力、高尚な言葉の人々に与える力強い影響を信じ、論理的思考の大切なことを説く。これはまた、実りなき俗流懐疑論に対する、ルーゼンの熱烈な楽天主義の現われでもある。

IV

ルーゼンの特質を規定するもう一つの重要な要素は、思考の抽象性、観念性である。彼には現実的要素が少い。現実観察力に乏しく、現実理解の能力に欠け、空想家であり、そして、言行不一致であって、これらの要素が彼を余計者としている。

小説の発端において、ルーゼンがラスンスカヤ家を訪れた時期は、1841

年の夏と推定される。その時、35歳のルーゼンは、すでに厳しい現実にかなり痛めつけられており、疲労の影を宿している。精神状態もかなり不安定で、精神の高揚と衰退の急激な交替が見られる。

ラスンスカヤ家のサロンで熱弁をふるったその翌朝、ルーゼンはラスンスカヤ夫人の娘ナターリヤに向って、「なにかも失敗ばかりで、転々とうろつき歩くのにも飽きて、休息する時です」と言って、彼女を驚かす。そしてナターリヤに「あなたは働かなければ、役に立つように努力していただかなくては」（第5章）と言われると、ふたたび、自分の義務について、進むべき道について熱烈にしゃべりだす。「そうです、私は行動しなければなりません……単なるおしゃべり、実りない空虚なおしゃべりに、言葉だけに自分の力を浪費してはならないのです」

また、ルーゼンは、自分の説く理想に共感する誠実な純粋な魂をどこに求めてよいか、と絶望的に言うにも拘らず、ラスンスカヤ家の家庭教師、雑階級出身と思われる大学卒のバシーストフに対して、ほとんど注意を払わず、顧みようもしない。このバシーストフこそ、ナターリヤとともに、ルーゼンの説く理想にもっとも共鳴した、彼の支持となりうる、次の世代を代表する人物である。

そして、皮肉なことに、言葉が単に言葉であり、行動の代りをしているにすぎないこと、行動力の無さ、障碍にぶつかった時の意志の弱さ等の、彼の欠点は、彼が愛情を告白したナターリヤとの関係において、はしなくも鋭く暴露される。

ナターリヤはルーゼンによって、新たに外部世界への心の眼を開かれた。ルーゼンの言葉はナターリヤの急速な精神的開花をうながした。彼女は彼の言葉の、すべての意味を理解できたわけではないが、新しい高い精神的体験の流れに、身を投じる。高尚な道徳的理想に惹かれる目覚めた魂である。

「ルーゼンが手にした本のページからは、さまざまな美しい姿や、新し

い明るい思想が、せせらぎの音をたてて、彼女の心に流れこみ、また数々の偉大な感情の、気高い喜びに打ちふるえる詢のなかには、歓喜の清らかな火花が、音もなく輝き、燃え上っていた」(第6章)

彼女の愛は、急激に燃え上った単なる情熱ではない。自己犠牲ということを理解するだけでなく、自分を犠牲にすることができるナターリヤは、ルーゼンの大きな目的に共鳴して、彼を、自分の人生における案内者、教師として認め、それゆえにルーゼンを愛したのである。

ルーゼンは恋愛について、美しいロマンチックな言葉を多く語る。しかし、彼のナターリヤへの愛は、直接的感情の発露ではなかった。彼はナターリヤと、愛情を確めあったそのすぐあとで、次のように言わなければならない。「おれは幸福だ、そうだ、おれは幸福だ」(第7章)あたかも自分を納得させるかのように繰返し言うのである。

ルーゼンは愛において不幸であり、ナターリヤへの愛も、彼の心のすべてを、つかむものではなかった。彼は理知的な熱中性はもつが、心の強い情熱はもたない。二人の愛は破局に終るが、ルーゼンは、ほんとうにナターリヤを愛していたのではないことがわかる。

ルーゼンは生活のすべての現象を定義づけ、分析し、抽象化する。熱中性も彼の心の奥深い琴線にふれえない。彼は愛情においても、一定の、頭のなかで書き上げられた図式に従う。

「私はあなたを知らなかった。しかし、知っているものと思っていました！……私は何時間もあなたと時を過しながら、しかもあなたという人を知りえなかったのです。知ろうと努めたことさえ、ほとんどなかったのです」(第11章)と、ルーゼンはナターリヤへの別れの手紙のなかで言う。ナターリヤの心のなかに、なにが起り、彼女の愛情がいかに真剣で深く誠実なものであるか、意志がいかに強固なものであるか、それはルーゼンの理解には、ほど遠いものがあった。ルーゼンの行動は、ナターリヤについての現実的な概念から出たものでなく、想像された概念から出ている。

ナターリヤの急速な精神的成熟とともに、彼女の性格も最終的に完成された。彼女のなかに根を下していたすべての善きもの、心のなかに眠って刺戟を待っていたすべての高尚なものが、外に現われ完成する。秘められた感情は大きな情熱のなかに、あふれでた。愛情によって生れた深い考えのなかで、彼女は将来の夫の偉大な仕事の助手となることを夢見た。ナターリヤは、魅惑ある「ツルゲーネフの女性」の最初の一人である。

それだけに、期待を裏切られた彼女の絶望と幻滅は深く大きい。しかし、悲劇の最高潮において、ナターリヤは勇敢な決断的な人間に成長していた。

「服従するんですって！ 自由だの犠牲だのについてのお説教を、実際にあてはめると、こういうことになるのですか？……」（第9章）と彼女は、ルーゼンの性格のいちばん痛いところをつく。彼女は、どんな困難が立ちほだかろうと、ルーゼンについていく覚悟だったが、言葉と実行との間に大きな隔りがあることを見てとって、ルーゼンを棄てる。彼女の性格はルーゼンのそれとは対照的である。彼女はルーゼンに欠けていたものをもっていた。

「なんという強い意志だろう……おれは彼女のまえでは、なんとみじめな下らぬ人間だったろう！」と、ルーゼンの心は恥と悲しみに、かき乱される。

やはりナターリヤに好意を寄せていたヴォルインツェフに対するルーゼンの行為にも、図式性が現われる。ルーゼンはわざわざヴォルインツェフの家に赴き、ナターリヤとのことを、愛の勝利を告げる。それは、ルーゼンにとって、尊敬すべき人への礼儀であり、高潔で誠実な者の為すべき義務と考えられる。理論的に彼が考えているところの、「道徳的諸関係の最高の原理の実現」である。デリカシーの欠かけた、気の利かないこの行為は、むしろヴォルインツェフを激怒させ、彼の自尊心を傷つける。

ルーゼンの「偉大さ」は、にわかに転落し、高い理想についての情熱的な言葉は、性格の脆さ、意志の弱さ、服従の感情、困難に直面しての無力

と隣合せていた。

ルーゼンは豊かでない「下位の貴族」に属するが、自分の手で生活の糧を得たことはなく、富裕な友人の世話になったり、人から金を際限なく借りたりして暮らしていった。こういう生活条件は、彼を実際的な仕事に向かなくし、現実の活動のなかに足をふみいれる機会を少なくした。彼は哲学的な思索や読書に多くの時間を割いた。学生時代のグループにおいては、優れた雄弁と豊かな知性のゆえに重きをなしていた。彼にもまた、言葉から実際的な活動に移ろうとする意欲はあった。しかし、「その思想を実行に移す点では不十分であった。それは一つには、その思想を完全に実現すべき地盤がなく、一つには、彼の見解や感情にとって否定的な要素のみを与えていた生活よりも、むしろ抽象的思考の助けによって発達した彼は、^①実際には、なにより頭だけで生きていたからであった」

ルーゼンは友人たちの私生活の細かい問題に口を出し、彼らの感情や行為の意味を、彼らに代って説明してやり、それも「自分や他人の生活の動きを一つ一つ、まるで蝶をピンでとめるように言葉でとめていく呪われた習癖」(第6章)のため、すべてを抽象的哲学的図式にあてはめようとして、事態を混乱させ、友人の反感をかってしまう。人間の具体的生活への現実的理解がなかった。そういうことの結果、実際の行動への逡巡と恐れも生じたのである。

ルーゼンはナターリヤとの悲劇を体験して、自分を深く見つめ、弱点を厳しく反省し、将来の道を考えざるをえない。ナターリヤへの別れの手紙のなかで、ふたたび立上ろうとする決意をのべる。

「私は、あなたが今朝、厳しいあざけりをこめて私に言ったように、なにか別の、もっと私にふさわしい仕事に専念するために、この地上に孤独のままに残ります……私はこの体験によって、より清められた、より強い

① ネクラーフ：1856年2月号諸雑誌批評。ネクラーフ選集（1巻）、1950年、375ページ。

人間となるかもしれません」

V

高い理想への奉仕，そのための偉大な行為への使命感，これは30—40年代のロマン主義者の確信であり目標であった。それゆえ彼らは，哲学的観念論，現実に対する抽象的図式的態度，ロシアの現実生活の認識不足等の大きな弱点を含みつつも——従って，ここに彼らの悲劇の原因があるのだが——目標に向って突進しないではいられなかった。

ルーゼンはラスンスカヤ家を去ってから，「いろんな経験をつみ，かれこれ20回も生活をたて直し，新しい仕事にとりかかってみた」（エピローグ）が，やはり現実との衝突に際して決定的に敗北した。それらの試みは，高尚な意図をもってなされ，私欲を含むものではなかったが，計画と方法は空想的であり，行動は現実的でなかった。彼は疲れはてた。エピローグに現われるルーゼンは，髪はほとんど白くなり，背はかがみこんでいる。

「顔には迫りくる老いの影が，早くも宿されていた」 表情や目つきは，とくに変わっている。「彼の全体の姿，時にゆるやかな，時に不自然にせきこんだ動作のなかにも，冷えきった，打砕かれたような言葉のなかにも，回復しがたい疲労と，心に秘められた静かな悲しみが現われていた」

数年間の生活の辛酸を物語る言葉は，かつてのロマンチックな華やかさを失なった。その代り，民衆的表現がまじってくる。ルーゼンは失敗の連続の挙句，自分の才能について深刻な疑問を抱かざるをえない。

「ぼくは，ほんとうに，なんの役にも立たない人間なんだろうか，この地上にぼくのための仕事はないのだろうか」と幾度も自問する。しかし，「そうざらにはないような力があることを感じないわけにはいかない」

それでは，なぜ，その力が実を結ばないのか？ ルーゼンは，「根気もなかった」「言葉に酔いもしていた」「美辭麗句に喰いつくされた」ことを認める。

しかし今の彼は、「卑近な目的をめざし、わずかなことにでも役に立ちたいと願っている」 そのためには謙虚にもなり、環境にも順応しようという気にもなっている。それでも、なんの良い結果もえられなかった。

「なにが、ぼくに他の者と同じように生活し行動しようとするのを妨げているのだろう……一定の地位につき、一定の立場に立つと、たちまち運命がそこからぼくを引離してしまう。どういうわけなのか、この謎をといてくれないか？」

自分の苛酷な運命を恐れるルーゼンの言葉には、やりきれない悲しみと怒りがこめられている。ここには、小さなものでもよいから、自分の活動の成果を、現実のものとして、この目で確かめたいと願う孤独な人間の心理が現われている。

しかし、他方、ルーゼンの心には、「地虫のようなものがいて、心をかじり責めたてる。最後まで平安を与えない」 地虫、それは、倒れてもなお立上ろうとする不屈の精神を支える「真理への愛の火」である。それが消えない限り、ルーゼンは周囲の現実と妥協することはできない。レジネフが言うように「その才能をもってすれば、どんなことだってなしとげられたし、その気になりさえすれば、地上のどんな富でもえられたはず」のルーゼンは自分個人のためには、なにものも得ようとしなかった。

エピローグでのルーゼンは追放される身となっている。ルーゼンのタイプの人々の活動は、窮極的には、現存の社会体制の廃止を目的としていた。

おそい冷たい秋の夜、宿るところもない、うらぶれたルーゼンは闇のなかに去っていく。不順の天候にも拘らず、どうしてもその日のうちに町を出ていかなければならない。ツルゲーネフは、ルーゼンとレジネフとの最後の対面を、とくにその結末の部分で、深い同情をもって抒情的に描いている。

「外では風が起り、窓ガラスを強く不気味に叩きながら、不吉な唸り声をたてていた。長い秋の夜がたちこめた。このような夜に屋根の下に身を

おくことのできる者、暖かい部屋をもつ者は幸せである……だが、神よ、家なき、すべてのさすらい人に恵みを垂れ給え！」

VI

ツルゲーネフはこの小説において、レジネフにはしばしば好意的態度を示し、レジネフの口から、ルーゼンへの批判の大半を語らせている。レジネフは、ルーゼンと対照的に優れた実務的才能をもち、自ら農地の経営に取り組んでいる新しいタイプの地主である。作者は、レジネフのような人道的な文化的な地主が現存の諸条件のなかで、できる限り農奴の状態を改善し、経済力の発展を図ることに、大きな期待をかけている。

レジネフもかつてはポコールスキーのグループにおいて、ルーゼンの同僚であり、彼らの感化をうけ、やはり高い理想に燃え、人類への奉仕を夢見た。しかし、ルーゼンと違って、まもなくそれらを現実的でないと考え、自分の仕事にのみ閉込めるようになる。青春の若き血の沸りや、夢や、ロマン主義の精神は消え去り、視野も活動の舞台も狭くなる。青年時代の高尚な精神的体験は、思い出として、過去の美しい姿としてのみ残る。レジネフは、現実と和解し、実務家に転生し、幸福な結婚をしたルーゼンである。

それでも、豊かな肯定的資質を備えるレジネフには、若き日の体験がその精神形成の上に一定の痕跡を残していることについては、疑うことはできない。

ルーゼンが最初、ラスンスカヤ家に滞在して、周囲から偶像視され、とくに若い人々に強い影響を示していると考えられている時、レジネフは彼の性格や行動の否定面を批判しはじめる。「家じゅうの偶像、予言者になって、家事の切回しや、家庭内のごたごたや、下らぬ事にまで嘴を入れる。これが男子のやることだろうか？」(第6章)と、ルーゼンが演じはじめたラスンスカヤ家での見事とはいえぬ役割を批判する。「ルーゼンの言葉

は言葉に終って、決して行為にならない」というレジネフの規定は、ルーデンの主要な矛盾を正確についている。また、ルーデンがその行動において、抽象的一般的概念から出発し、人間間の現実的関係を無視することについての批判は、主にレジネフの口から語られる。

しかし、レジネフの批判的判断がぜんぶ正しいのではない（後になって彼自身、それが全部正しくなかったことを認めている）。この時のレジネフの立場は、青春時代と訣別して、築きあげた幸福な生活を乱されたくない地主としての立場である。彼はルーデンの言葉の力を知っていた。ルーデンはかつて「若きデモステネスそっくり」だった。その言葉が純真な未経験の魂を惹きつける力をもつことを知っている。レジネフはナターリヤのことを念頭において、「その言葉が若い心をまどわし、ほろぼすことがある」と言う。ルーデンの「生活の高い理想のため」という呼びかけは、レジネフや、後に彼の妻になるリーピナや、ヴォルインツェフを含む田舎の「文化的階層」の狭い利益とは相反する。

しかし、他方には、別の顔をもったレジネフが存在した。青春時代にポールスキーやルーデンの影響をうけたレジネフであり、それは、もっと別の観点に立って、ルーデンに客観的な評価を与えることができるはずである。狭い実際的な面からする評価とは別に、ルーデンの社会生活における意義と、その歴史的な役割についての評価である。

後半（第12章とエピローグ）において、こんどは、レジネフはルーデンを擁護し、かつ、いったい、なにがルーデンをして真の活動家たることを妨げたのか、ということについて、批判的評価を加える。この時のレジネフの立場は、やはり、リーピナとの幸福な結婚生活を送る安定した地主であることには変りはないが、自分の現在の姿から過去をふり返り、「よき時代の友」の身の上を思い、友のなかにある優れたものを認めざるをえなかった者の立場である。

レジネフは、ルーデンには「性格がなく」、彼が「ロシアを知らない」

ことを指摘する。このことは、情熱、強固な意志、意図を実現する能力のないこと、現実を知らないことを意味する。そして、「それは彼の罪ではない。悲しいにがい運命である。その運命のゆえに彼を責めることはできない」それは彼の不幸である。作者はこの言葉によって、余計者たちの悲劇的運命が、農奴制秩序のなかでの社会生活によって決定されたものであることを表現する。

レジネフは、性格がないことを指摘するが、他方、彼の理性的熱中性の存在を強調する。「彼の冷たさを非難したこともあったが、あれは正しくもあり、間違ってもいた。彼のあの冷たさは血のなかにある。これは彼の罪ではない。頭の中は冷たくない」「彼には熱中性というものがある……これは現代ではもっとも貴重な特質です。われわれは、がまんならぬほど分別くさくなり、冷淡になり、生気を失っています。眠りこんでいます……だから、たとえ一瞬間でも、われわれをゆり動かし、心を暖めてくれる者には感謝しなければなりませんし、もう、そういう時なんです！」と、レジネフは自分のなかに失われたものを懐しむとともに、彼自身ではなくて、ルーゼンが彼の活動によって、社会にもたらしたものがあることに注意を向ける。「彼は自分ではなにもしないでしょう、それは彼のなかに血が、性格がないからです。しかし、彼がなんの利益も、もたらさないだろうし、もたらさなかったと、誰が言えるでしょうか？」

それは、ルーゼンが、彼自身とは違って、行動力を持ち、自分の意図を実行する能力をもった若い人たちに「善き種子を播いた」ことであった。

エピソードにおいてレジネフは、今はよるべきなき身の上のルーゼンの、痛ましい告白を聞いて、友への尊敬の念にとらえられる。「善き言葉、これも行為だよ」と、言葉の力を認めたレジネフは、彼の無欲と、思想的非妥協性に敬意を表する。「君はふしぎな男だな！　どんな考えで仕事を始めても、いつも必ず自分の利益を犠牲にしてしまう。どんなに地味が肥えていても、好ましくない土壌には根を下そうとしない」

ルーデンは形ばかりの持ち村へ帰ろうとする。しかし、彼のなかには、なおも、生活のさまざまな煩いにも拘らず、真理への愛の火は強く燃えつづけている。

レジネフは、安定した地位や財産や幸福な家庭をえた。すぐれた面も少なからずもつ。しかし、やがて彼は安住の休らぎのなかに埋没していく可能性をもつ。作者が期待したような、社会の指導的立場に立つことは、ありうるだろうか。これについて、ピーサレフは、レジネフのような人たちが人道的思想に満ちていることを認めつつも、彼らの限界を次のように指摘している。彼らは「この思想のために、現実との闘いに入ることはない。ただ自分の生活をこの思想に準じさせて維持しているにすぎない。……これらの人々は温和であり、気むづかしくはなく、他人の愚かさや卑劣さをも含む、彼らを取巻くすべてのものに対して忍耐強い。活動家としては、^①彼らはなんの役にもたたない」

ルーデンはレジネフと比べて、人生の「落伍者」であり、宿るべき家さえない浮き草である。レジネフは、思想の世界の廃兵としてのルーデンに、安息所として自分の家を提供することを申出た。ルーデンはその安息所に入る資格を自ら否定するが、しかし、ルーデンが自分の安息所をもつことのできないほんとうの理由は、その資格にあるのではない。この浮き草は、たえず、敗北し追われながら、善き種子を播いていったからである。

VII

ツルゲーネフは、さらに、ルーデンとバシーストフとの関係において、ルーデンの歴史的な役割を、より明らかにしようとした。30—40年代の貴族インテリゲンツィヤと、新しい世代、50—60年代の雑階級人インテリゲンツィヤとのつながりである。

① ピーサレフ：ピーセムスキー、ツルゲーネフおよびゴンチャロフ。ピーサレフ選集（全4巻）、第1巻、1955年、227ページ。

バシーストフはその後者の代表者として、ルーゼンの高い理想の洗礼をうけた率直で誠実な青年である。人生の意味を新たな角度から開いて見せてくれ、活動の広い展望を与えてくれたルーゼンの、いくつかの欠点も、その過去も、彼にとっては問題ではないかのようにであり、ルーゼンは非難されることのない権威である。バシーストフは、ルーゼンが去ってから2年の後でも、彼を「天才的性格」^①として、熱烈に崇拜している。

「ルーゼンの影響ということについては、暫って言いますが、あの人は相手をゆり動かすだけではなく、じっとしてられないようにします。止まっていることを許さないのです。土台まで引繰返して心を燃え立たせませす」(第12章)

作者はルーゼンたちの思想の活動が、むだに終わったのではなく、雑階級人によって受けつがれていくことを示した。

バシーストフの形象はおぼろげにしか描かれていないし、その後の精神的発展についてもふれられていない。ツルゲーネフは50年代の中頃には、まだ、雑階級人の思想、心理、性格、行動についてよく理解していなかった。作者は、社会的な力としての雑階級人の登場を、芸術的直感によってとらえ、バシーストフに、ルーゼンの善き種子が播かれたことを認めた。

1860年にエピローグの最後に、もう一つの場面が書き加えられた。それは、1848年6月、フランス革命の動乱のなかのパリで、ルーゼンがバリケートの上で死ぬ場面である。このことによって、この思想の継承性、30—40年代の進歩的貴族インテリゲンツィヤとロシア解放運動のつながりが、さらに強調された。

ルーゼンがレジネフに語った、20回も生活をたてなおそうとした苦難の内容の話の時期は41年から47年頃に相当する。この時期といえ、ロシア社会において、国の進路と在るべき姿をめぐる、いわゆるスラヴ主義者

① ツルゲーネフはこの小説に最初は「天才的性格」という題名を与えようとした。

と西欧主義者とのあいだに、激しい論争がかわされはじめた時期である。そして、西欧主義者たちのなかでは、さらに自由主義者と社会主義者との対立が芽生えている。これはまたゲルツェンやベリンスキーが、観念論哲学から唯物論哲学へと移っていった時期でもあった。こういった動きについては、小説ではなにも述べられていない。ルーゼンがそれをどのように受けとめたかは、むろん不明である。明らかなことは、ルーゼンが変らなかつたことだけである。時代と、社会の思想的動きが変貌していても、以前の思想の忠実な信奉者であるルーゼンはそのまま残った。ルーゼンは30年代の特徴的な思想及び思考の型を一貫して保持していた。骨の髄までの観念論者として、新たな動きに応じて、自己を改造していくことはできなかったのである。それは彼の限界であり悲劇であった。

しかし、30年代の学生のグループのメンバーがあるいは俗物となり、あるいはレジネフのような人物になっているとき、作者は、社会主義者にはなりえなかつたにせよ、人民の側に立ちえたルーゼンの姿をはっきりと描いたのである。

ルーゼンがなぜバリに現われたか。その説明はなされていないが、心のなかに燃える「真理への愛の火」が、ふたたび彼を高い理想に、つき進めたことは疑いない。作者は一見、ルーゼンをむだに死なせているようである。すでに敗北の明らかなバリケード上での彼の死は、現実には誰にもなんの役にもたない自殺にひとしいものである。しかし、思想の廃兵と言われ、自分の活動の舞台のないことを知り、自分の時代がすぎたことを認めているとはいえ、ルーゼンのなかには、いまだ消えなかつた意識的熱中性がふたたび燃え上つたのである。安らぎを知らぬ生活にふさわしい最後であった。人民の事業のシンボルとしての赤旗と、実践的無能さのシンボルとしての、ひん曲つた、なまくらサーベルをふりかざして、ルーゼンは死んだ。そして彼の死とともに、ロシア解放運動の貴族的段階も本質的には終つたことが示される。

VIII

ツルゲーネフは、この小説において、一方では、30—40年代の貴族インテリゲンツィヤが、ロシアの解放運動のなかで果たした肯定的な役割を示し、他方、彼らを弱い人物となしたものを批判した。

ルーデンは高い哲学的イデーに生き、その実現をめざして果せなかった進歩的な貴族インテリゲンツィヤである。反動的なニコライ治世の下にあって、政治的な活動はその可能性をうばわれ、農奴は打ちひしがれ、散発的な騒擾によって抗議を示していた。その時、これらのインテリゲンツィヤは、ドイツ古典哲学の研究を志し、そのなかに、ロシアの発展の理論的基礎を求めた。この時期は、ロシアの社会思想の発達における、欠くことのできない実り多い段階であった。しかし、彼らは、広汎な改革を志しながらも、思考の抽象性を克服できず、言葉と行為との統一を果せず、デカブリストと同様に、人民大衆からは隔絶され、活動の現実的基盤をもちえなかった。ここに彼らの悲劇があるが、その源泉は、彼らの主体的資質にのみ帰することはできない。

ルーデンは、オネーギンとちがいで、上流社会において、為すこともなく溜息をつき、才能をもてあます退屈している貴族ではなかった。しかし、オネーギンはデカブリストにはなりえなかったにせよ、それに接近する可能性はあった。

「オネーギンの弟」たるペチョーリンは、価値なき行動に自分のあり余る知力と才能を無益に費している。しかし、ペチョーリンも、冷淡な個人主義に到るまでに、出口を求めてさまざまな可能性を試みて傷ついた青春を経てきている。彼は遅れてきたデカブリストであり、異なる条件の下では有益な活動家となりうる可能性をもっていた。

ルーデンは、抽象的とはいえ、はっきりした目的をもち、自分の幸福はかえりみなかった。しかし、彼の計画は客観的土台をもたない。現実の客

観的研究に基いていないゆえに、すべて挫折してしまう。一時的な落胆は繰返されるが、現実との妥協は最後まで許さなかった。「真理への愛の火」が彼の精神の強力な支えである。30—40年代の現実に条件づけられる彼には、やはり出口はなかった。彼はロシアを知らない。しかし彼の言葉の活動は歴史的に欠くことのできない有効なものであった。

ネクラーツフは小説が発表されると同時に、この作品の意義を特徴づけて次のように言う。「それは、そのイデーにある。つい最近まで、知的な生活的な運動の先頭に立っていた人々のタイプを描くことである。この運動は彼らの熱中性のおかげで、わが国の社会の最良の最新の部分において、ますます多くの仲間を徐々に包容していった。これらの人々は大きな意義をもち、深い実り多い足跡を残した。その滑稽な、あるいは、弱い面にも拘わらず、彼らを尊敬しないわけにはいかない^①」

そして、彼らの後に続く者は、「もしも今日、自分たちが一步前進できるとすれば、それはひとえに、彼らの先駆者たちの闘いによって、彼らのために道が開かれ、清められているおかげであるということを知っている。そして誰よりも多く、自分の教師たちの活動を尊敬するであろう^②」

空想家ルーデンが、レジネフのような実務家よりも、はるかに有益な人物であったとは、ゴリキーの認めるところである。「彼は革命思想の宣伝家である。現実の批判者である。彼は、いわば処女地に鍛を入れた。その時代に、実務家はなにをなすことができたか^③？」と、ゴリキーは彼の社会的な意義を強調しているが、同時にまた、彼が「饒舌の徒であり」、現代にとって、有害な人物であることを指摘している。

ルーデンたちは30—40年代の運動の先頭に立っていたが、彼らの時代は

① ネクラーツフ：1856年2月号諸雑誌批評。ネクラーツフ選集(1巻)、1950年、374～375ページ。

② チェルヌイシェフスキー：エヌ・オガリョフの詩。チェルヌイシェフスキー選集(1巻)、1951年、409ページ。

③ ゴリキー：ロシア文学史：邦訳。五月書房。1952年、下巻、474ページ。

終った。しかし、小説の執筆された50年代には、彼らの影響がまだ強く残っていた。そして、人々を「周囲の現実より高めるのではなくて、現実そのものを、われわれがすでに自覚した理性的要求の水準まで引上げるか、引上げることを教える人々が必要^①」になった時代には、彼らの影響はむしろ有害になってきた。すなわち、思想と希求の認識が求められるのではなく、その実現が求められる時代には、言葉だけでは先進的な人間となりえないだけではなく、抽象的、観念論的な言葉は事を錯綜させ、本質を陰蔽することもできた。言葉で行為の代用が果せた時代ではなくなった。

ドブロリユーボフが『オブローモフ主義とはなにか?』（1859年）のなかで、ルーヂンのタイプの者を本質的にはオブローモフとして批判したのは、上述の意味においてであり、彼らがかつて果した役割についてではない。怠惰なオブローモフに変成した彼らが、現在果しつつある役割について、ドブロリユーボフは批判的見解をのべたのであった。

① ドブロリユーボフ：今日という日はいつ来るか？ ドブロリユーボフ選集（全3巻）第3巻，1952年，34～35ページ。